

デジタル化と地域

〈連載〉

中川 大介 / 西野 鷹志
庄 司 証

はこだて街なかプロジェクト

米田 哲平 / 櫻坂 麻規子

TAKE FREE



北海道の技術の世界の海へ――。

東和電機製作所が世界トップシェアを誇る「HAMADE イカ釣機」。北海道の漁師の勘と経験をデジタル化し、マイコン制御によるイカ釣りの自動化を実現しました。現在、その技術は世界へと広がっています。たとえば、お客様の船に同乗しての操作技術の提供はもちろん、多様なニーズに沿った改良・修理など、きめ細かなサポートを行い、大きな信頼を得ています。



HAMADE イカ釣機 EX-2 (国内向けモデル)

株式会社 東和電機製作所

〒040-0077 北海道函館市吉川町 6-29 TEL: 0138-41-4410

<http://www.towa-denki.co.jp/>

はじめりはひとりの漁師の声でした。

昭和38年、弊社は函館ドックの下請工場として、

船舶の配電盤、分電盤を製作する

東和電機製作所として創業いたしました。

間もなく、ある漁師の方から、その当時存在しなかった

手回しのイカ釣機があればいいのに。

という声をお聞きし、それがきっかけとなり

「全自動イカ釣機」の開発がスタートしました。



特集

デジタル化と地域

ライフに合わせたワークを
山田圭飛 p5

オンライン語学講座、生徒は世界中に
岡本みなみ p6

完全リモートで地方暮らし
クリス・サルズパーク p7

原点は「それぞれの困りごと」
中川真吾 p8

地方でできる仕事は多い
宮田一人 p9

オンラインが今後もメインに
ひづめみかへる p10

アンケート
デジタル化で生活はどう変化しましたか。
他の世代に対して感じることは。 p11

昔の子ども、今どきの子ども
お小遣い p12 ● 庄司 証

人と水と空と森の話
風景の中の時間 p13 ● 中川大介

はこだて
たてものがたり p16 ● はこだて街なかプロジェクト

[ライカはゆく] p18 ● 特別寄稿 / 第24話
わび寂びライカ
西野鷹志 / 文・写真

連載 米田哲平 / 櫻坂麻規子 p20

H I F ● インフォメーション INFORMATION p21-22

本誌設置場所
FROM EDITOR・奥付 p23

デジタルと
アナログの
狭間で。

旅行会社に勤めていた頃、修学旅行の行程表は手書きで丁寧に書くもので、ワープロで書かなくてけしからん、誠意が伝わらないと言われたものだ。文章にしても原稿用紙に書かないといいものが書けないと信じていた。受験勉強だって、辞書がボロボロになるまで使うのがいいとされ、手に鉛筆のタコができるくらいにノートやドリルに書くのが普通だった。

それが、1990年辺りからデジタルは一気に世界に広がっていく。わからないことがあれば、すぐ検索するし、都会の電車の乗り換えも、知らない場所もデジタルマップがちゃんと案内してくれるから安心だ。欲しいものだって、ほとんどがネット上にあるし、仮想空間で会議や商談ができるメタバースも広がっている。

まあ、そんな時代になっているのは知っているが、アナログのささやかな抵抗も小気味いいものだ。たまには、万年筆なんかを取り出して綴ってみるのもいいし、話をする時も、スライドなんて使わずに、自分の言葉でしっかり語りかけたいと考えたりする。まだまだ、アナログに居心地の良さを感じる自分がある。

(一財)北海道国際交流センター(HIF)

専務理事 池田 誠

毎日の暮らしが、世界との交流の場。

(一財)共立国際交流奨学財団が管理・運営するつつじヶ丘男子学生会館、相模大野学生会館は、日本人学生・留学生のための学生寮です。日本人学生はもちろん、外国人留学生と生活をともにする中で、互いの理解を深め、友情を築き上げていくことで、国際人としての意識も高まり、学生生活がより豊かなものになることでしょう。

入居者募集中



両館ともに、24時間管理人常駐で食事つき、家具・インターネット完備で、初めての一人暮らしでも安心してご利用できます。

一般財団法人 共立国際交流奨学財団



〒101-0021
 東京都千代田区外神田 2-17-3 アヤベビル 4F
 TEL. 03-5295-0205 平日 9:00~17:30

www.kif-org.com



アジア諸国からの前途有望な留学生に、いささかなりとも奨学援助の手を差し伸べることを決意し、国際友好親善ならびに明日のアジアを建設する原動力となるべく、人材の育成を目的とする。

デジタル化と地域

Local with digitalization

新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）のなか、社会のデジタル化が急速に進んでいる。オンラインでのミーティングは日常化し、EC（電子商取引）はさらに活発になり、行政や企業の事務処理も電子化されて、仕事や暮らしは大きく変わった。適応を迫られて大変なことは少なくないけれど、地域を越えたつながりを容易にするデジタル技術は、地方に住む私たちに新たなビジネスの芽をももたらしている。止まらぬデジタル化は地域をどう変えるのか。変わらぬものはあるのか。デジタル技術を仕事や暮らしに採り入れている人たちの話から探ってみた。

ライフに合わせたワークを

山田圭飛／ハコレコドットコム（株）代表取締役CEO

函館市内のビル8階にあるハコレコドットコムの事務所の入り口には、大きなディスプレイに「SDGs」の17の目標を示したアイコンが映し出されている。SDGsとは、国連が掲げる「SDGs」（持続可能な開発目標）のローカル版。Development（開発）をLocal（地域）に置き換えて社内メンバーと

独自に作った。事務所は「ワークラボ函館」という施設名で東京の会社と共同で運営しているという。「SDGs」の目標17個はどれもハコレコが業務を通して見つけた課題なんです」と山田さん。ハコレコの事業の対象はローカル、函館であり、「地域に向き合い、

まちを良くする」という理念は設立当初から一貫している。WEB制作と並ぶ事業の柱が「シビックテック」。テクノロジーを活用して地域課題を住民自ら解決する手助けをするものだ。例えば函館で働きたいという人のために企業と求職者のマッチングを行うWEBサイトの運営・保守を函館市から受託し、それがやがて人手不足や少子高齢化の解決にもつながると期待する。「リソース（資源）に乏しく、

お金も人材もないのが地方の現状」と語る山田さんだが、できることはやろう、と三つのことに力を入れている。一つは「活性化」で、地域課題をWEB（情報技術）で解決していくことだ。二つ目はWEBサイトを通じた「発信」。三つ目はエンジニアの「育成」だが、これが難しいという。「技術が急激に変わる今、企業はエンジニアを求めており、ある社が別の社へエンジニアを派遣することも多い。その結果、エンジニアの会社への帰属意識が薄れ、モチベーションが保てないといった問題が起きている。いかに多くのエンジニアを正しく育成するか、IT業界にとって大きな課題です」

ハコレコドットコムには青森や札幌で働くスタッフがおり、働く場所を問わないIT業界の強みを生かしている。現在の売り上げの半分は東京の企業からの受注、そうした受注は要求水準が高く、スタッフのスキルアップにもつながっているという。大学時代に起業した山田さんにとって、地域の新たな起業家の発掘が次のテーマだ。「ライフ（私生活）に合わせたワーク（仕事）を創出し、働きながら人生を豊かにする。働く時間の質を上げる。そんな働き方をこの地域で広げていきたいですね」



やまだ・よしとか／公立ほこだて未来大学を4期生として卒業。在学中の2005年11月に函館でハコレコドットコム企業組合を起業。2014年に株式会社に変更して現在に至る。

オンライン語学講座、生徒は世界中に。

岡本みなみ／オンラインプラットフォーム「CAFÉ TARK」英語教師

「オーストラリアに住んでいた2017年、オンラインで日本語や英語を教えていました。使っていたのは『Preply』というプラットフォーム。世界中の講師からオンライン上で学べるシステムで、私が始める5年

くらい前からあったと思います」と岡本みなみさん。2020年からのコロナ禍でオンラインは飛躍的に普及したが、かなり前からシステムは構築されていたことになる。

岡本さんは大学時代からアメリカで過ごし、その後ワーキングホリデーでオーストラリアに滞在し、ドイツの大学院でアートセラピーを学んだ。日本に戻ったのが2019年の秋。コロナ禍で動けない状況の中、オーストラリアで行っていたオンラインの語学講座を思い出して、見つけたのがオンラインプラットフォーム「CAFÉ TARK」だった。

講師登録は至って簡単。無料のアカウント登録申請、自身のプロフィールの設定、運営会社



おかもと・みなみ／函館市生まれ。親の仕事の関係で岩手県で育ち、小学校5年生から高校まで函館で過ごす。米カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）卒業後、教育関連の企業で働き、オーストラリア、ドイツ滞在を経て函館在住。

のインタビュを経て登録されればレッスンを始められる。ローカルに居ながら生徒は世界中に持つことができ、受講料はクレジットカードなどで事前に支払われる。「純日本人、講師歴7年のプロ英語講師、TOEIC940点などとプロフィールを入れ、『英語の音の法則を知ろう』などとレッスン方法を細かく記載することで、生徒の検索にヒットするようになるんです」

オンラインのレッスンでも、教えたことはじゅうぶん伝わると実感するという。YouTube動画では、英語学習法のアドバイスなどを無料で提供して、生徒も講師を身近に感じられるようだ。3歳児から50代まで、多い時は50人ほどに教えている。

「語学講座はオンライン授業との相性がいいと思います」と語る岡本さんだが、「パソコンの中だけで世界を見るより、リアルに見た方がいい。異文化の中で感じられるものはたくさんあるはず」とも話す。さまざまな異文化を体験してきた岡本さんだからこそ、オンラインとリアルの「ハイブリッド」で世界を理解することの大切さを伝えられるのだろう。



「CAFÉ TARK」の岡本さん紹介ページ

完全リモートで地方暮らし

クリス・サルズバーク／オンラインサイト「shopify（シヨップファイ）」スタッフ

クリス・サルズバークさんは現在、カナダに本社を置くオンラインサイト「shopify（シヨップファイ）」の運営会社に在籍し、函館に住みながら完全リモートで働いている。「パソコン1台あれば仕事はできますが、函館はコワーキング（共同作業）スペースがほとんどなく、作業場所を探すのが難しくくて。函館市地域交流まちづくりセン

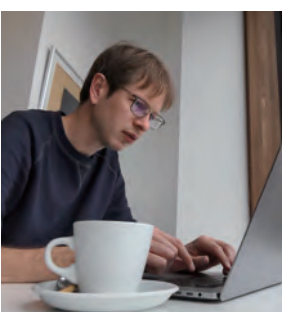
ターやスターバックスで作業しています。電源やWi-Fiが使えないのがいいですね」

来日後の2014年からシステムエンジニアとして働き、以前の勤め先でも一部リモートを採り入れていたという。2020年3月、気に入った函館に引っ越すために完全リモートのshopifyを見つけて転身した。

「EC（電子商取引）ビジネスで有名なのはアマゾンですが、アマゾンは事業者と消費者を結び【B（事業者）to C（消費者）】ビジネス。それに対してshopifyは、ネットショップに出店する事業者向けにマーケティングなどのツールを提供する【BtoB】ビジネス。日本でも利用が増えているネットショップBASEなどは日本国内だけのショップで

すが、shopifyは世界の店舗を対象にしているのが大きな違いです」という。

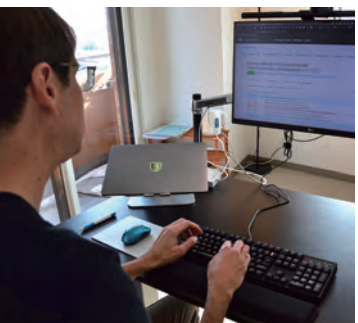
Shopifyで最初に手掛けた仕事は中国向けのシステム開発で、シンガポール人で構成するチームに入り、その1年後に、自分の希望でShopifyの基礎の部分を作っている北米とヨーロッパが中心のチームに異動した。「会社には数千人のシステムエンジニアがあり、大きなクルーズ船の船底にあるエンジンルームで働いている感じです」という。仕事は24時間、世界中で行われており、クリスさんが仕事をしている間に同じチームの人たちが寝ていることもあるという。「チームの仲間とはチャットやプロジェクトページへの書き込みでコミュニケーション



カナダ・モントリオール出身。オランダ・アムステルダムでの研究生活を経て来日。東京に16年住んだ後、2020年3月から函館在住。

を取りますが、プログラミンのコードを更新する過程でも十分気持ちを通じ合えますよ」

完全リモートと一部リモートでは働き方が全く違うという。「今の仕事で自分の上司に会ったことは一度もないんです。今後、チームの20人ほどがロンドンあたりで会う予定です」と笑顔を見せるクリスさん。デジタル化の進展は働き方を大きく変え、「気に入った場所に住み、働く」という選択肢を大きく広げているようだ。



原点は「それぞれの困りごと」

中川真吾 / 株式会社ロカラ (Localer, Inc.) 取締役

札幌で放射線技師として8年間働き、人の生死に向き合ってきた中川真吾さん。「こうして人は死んでゆくんだな。自分もいつかー」。そんな思いが頭をよぎった。「そうしたら、北斗市で5代続く実家の農地はどう



なるんだろう。代々苦労して耕してきた土地なのに」
農業という仕事について知識はなかったが、農業が気になり始めた。「毎日、近所の農家に行って、困っていることはないですかと聞きまくりました。今考えると、聞かれた方は『なんでそんなに』と気持ち悪かったかも」と笑う。

やがて、作物のネット販売をしてみたい、パートがなかなか集まらないといった相談を受けるようになった。ネット販売や求人知識があったわけではなかった中川さんは、ウェブサイトの運営会社を探すところから始めた。中川さんが近所の農家の情報を発信してサポートし、サイトで注文があれば農家が作物を梱包して発送する。ロカラ

の柱となるネット販売出店支援事業がスタートした。
「全然売れない、アクセス件数も少ないなど、簡単にはうまくいかない。だからといって販売促進にそんなにお金をかけられなかった」と当時を振り返る。それでも顧客とのやりとりを中川さんが代行することで農家は楽になったという。

「ドローンで農地を撮影して消費者に生産現場のようすを伝えたり、加工した野菜をデザインしたパッケージを作ったりと、農家の取り組みを支援してきました」。農家の困りごとを、多様なノウハウ・技術を持つ協力者とともに知恵を絞って解決する。そんな取り組みの中から、道産素材にこだわり保存料などを使わない「北ビクルス」が生



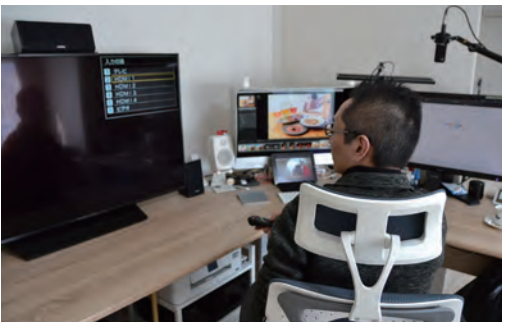
なかがわ・しんご / 北斗市出身、弘前大学卒。札幌市内の病院で診療放射線技師として勤務後、農家向け支援事業を開始。2016年7月に「株式会社ロカラ」を設立し、翌17年、函館に移る。

ロカラが運営する産直型ECサイト「地元市場」には現在、農水産物・加工品、スイーツなどを手掛ける200以上の生産者や事業者、企業が参加する。サイト制作、映像制作なども手掛けるロカラの社名の意味は「地元」だ。「ローカルを魅力に、人々に幸せを」とミッシェンを掲げる中川さんは「それぞれの困りごと」を原点に、新しい道を切り開こうとしている。

地方でできる仕事は多い

宮田 一人 / カメラマン、「Photo箱」代表

「祖父が子どもの僕に専用のカメラを買ってくれて。カメラやメカにはそのころから興味があったんです」。そう語る宮田一人さんは、1895(明治28)年創業の老舗人形店「兼大丸宮田商店」(函館市若松町)



の5代目だ。

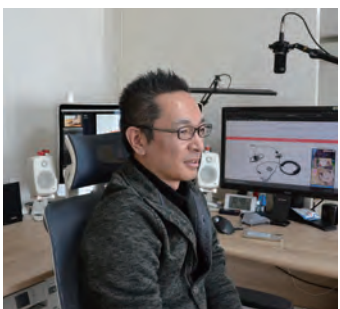
メカ好きが高じて大卒後、札幌で車関係の仕事に就いた。仕事の傍ら撮影の腕を磨き、カメラをはじめ、初めてパソコンに触れたApple社のMacintoshやiPhone・iPad、ガジェット(PC周辺機器)に関するブログを書くのが趣味だった。

「函館に帰ってきた28歳のころ、ほとんど知り合いもない中で、つながりを持ったのがブログ仲間たちでした」。ブログを通じて知り合った仲間とオンラインで情報をやり取りしながらカメラやメカにさらに入れ込み、2015年7月、兼大丸宮田商店の新規事業として「撮影部」を立ち上げ、店舗2階に写真スタジオを造った。

撮影部は愛称「Photo箱」。箱

館の「箱」と、写真を入れるPHOTOBOXの「箱」をかけた。宮田さんがフリーカメラマンとして注文を請け負う形だ。ポートレート、イベント、ペット、家族、商品」。依頼はメールで受け、打合せはオンライン。ガジェットも活用して作品を仕上げ、完成品はデータで納品する。静止画だけでなく動画も撮る。PRはホームページとフェイスブックだけだが、「記念になるロケーションフォト(屋外などでの写真)を函館で」といった依頼もあるという。

「最近はおオンライン会議用アプリZoomを使う会合などのセッティングの依頼もあるんです」と宮田さん。もともとデジタル技術を駆使してきたから、コロナ禍で一気に加速したオンライン



みやもと・かずと / 函館市生まれ。札幌の高校へ進学し、就職して計12年間札幌で暮らす。2005年、実家の兼大丸宮田商店を継ぐために帰郷し、07年から代表。一般社団法人日本UAS産業振興協議会(JUIDA)のドローンパイロットライセンスを持つ。

ンの活用は驚くことではない。「デジタル化が進んで簡略化できることが増え、地方に居ながらにしてできる仕事は多い。ただ、やはり感動してもらえない写真撮るには、しっかりと現場に行ってロケーションを確認しただけは簡略化できませんね」



デジタル化で生活はどう変化しましたか。他の世代に対して感じることは。

Q U E S T I O N N A I R E

- 20代女子がメールやLINEで使う絵文字を「おじ文字」と呼んでいた。絵文字を使うのはおじさんの証拠。メールに絵文字の連打は気持ち悪い。と聞き驚愕。(30代女性)
- 携帯は最初からスマホだからガラケー触った事ない。(20代女性)
- FACEBOOKを使うのは年齢層が高め。(20代女子)
- 年配はハッシュタグが長すぎて使い方下手だと思って思う。(20代女性)
- 娘の小学校の連絡網が一斉送信メールになって自分の小学生の時にあった電話連絡網がなくなった。(40代女性)
- 知育玩具のゲームの中にプログラミングがあってビックリしました。(40代女性)
- 職場内でデジタル格差があり、下剋上の上になっている。(40代女性)
- デジタル化で眼精疲労がすごい。(40代女性)
- 直接電話やメールがしづらい間柄の人にSNSで簡単に接触できるようになった。(40代女性)
- SNSでの乗っ取りや誤送信等の問題が起きる事が怖い。(40代女性)
- 若い世代の細切れLINEにどう付き合っよいか分からない。(30代男性)
- やっぱり手と目で確認したいから、ネットバンクは使わない(60代男性)
- 物・事が簡略化され、必要な物を的確に把握する事ができるようになった為、地域に縛られずビジネスやショッピングが出来るようになった。(40代男性)
- 三次産業にアンチデジタルがいると仕事が非効率になるので三次産業では避けたい人種。(40代男性)
- 加工技術が進みすぎて、写真に真実がなくなってきていると感じる。(30代女性)
- コミュニケーションが簡単になった。対面

- じゃなくても話せる分コミュニケーションは近いけど距離は遠い。(20代男性)
- スマホがある事で情報も物も手にいれやすくなったのありがたい。アクセスビリティ。(20代男性)
- X世代とのギャップ。スマホの撮影の仕方からボタン操作や原理の理解し方など全然違う。仕組みを理解しない状態で使っているところにギャップを感じる。(20代男性)
- SNSのアップするコンテンツも違いある。アカウント写真もX世代は風景等だけど、Z世代付近は自撮りや加工した写真を使用している人が多い。(20代男性)
- 人とすぐ連絡できるようになった。(50代女性)
- 最近ググるよりタグ(Instagram)って飲食店を探す事が多い。(50代女性)
- 繋がりにたくない人もいるので本名でのSNSは活用しない。(50代女性)
- 若い人はネット社会が立派なリアル社会になっているように感じる。私たち世代はリアルとネットが別々の感覚。(50代女性)
- 母親(60代)がネットで買い物出来ずに、代わりに購入を頼まれる。何故出来ないのかがとても不思議でならない。(購入ボタンで爆発すると思っているのかな。)(30代女性)
- SNSは旬の移り変わりがとても速いと感じる(40代男性)
- SNSの利用で、自分が全く知らない人が見えていて、対面した時の自己紹介がとても簡単になった。(40代男性)
- 小学校でタブレットが支給になり、学会でも動画を駆使する等の変化がおきている。そのうち、教える技術に長けている優秀なパフォーマー(例えばYouTuber)が画面の中で講師をし、教師が補佐に回るというような構図の時代がくるかもしれないと感じている。(40代女性)



みか〜るさんがデザインしたスイマーのトートバッグ。

みか〜るさんは白鳳を退社して帰郷し、20年から新たな運営会社所属のブランドディレクターに就任し、深い愛着を持つスイマーの仕事が続いている。以前は打ち合わせなどの必要があれば1週間ほど東京に滞在していた。だが、コロナ禍でオンライン化が劇的に進み、

ロナウイリスの影響が少しずつ収まってきたとしても、これだけ定着したオンラインでのやりとりが今後もメインになるでしょうね」とひづめさん。地方に住むクリエイターにオンラインは強い味方となるようだ。地方ならではの生活環境が、感性を刺激して素晴らしい作品を生み出すことに期待したい。

オンラインが今後もメインに

ひづめみか〜る / 雑貨ブランド「SWIMMER」(スイマー) デイレクター&デザイナー

函館で暮らした少女時代から、雑貨ブランド「SWIMMER(スイマー)」の商品をプレゼントや自分のために買っていたというひづめみか〜るさん。上京してスイマーの直営店を訪れ、「ここで商品を作るぞ」と思いを強くしたという。短大を卒業し1995年、念願通りスイ

マーのデザイナーとなり、独特の「へんてこカワイイ」デザインを次々と世に送り出し女性たちの熱烈な支持を得た。株式会社白鳳は2018年にスイマーの展開を終了し、2020年にはその権利を新しい運営会社株式会社に譲渡した。ひづめさんは白鳳を退社して帰郷

打ち合わせもデータのやり取りも在宅で可能になったという。「上京してリアルで打ち合わせをしていたころは、メーカーの担当者と直接話したり、展示会場を実際に見ながらセッティングできたりと、それはそれでよかった。今は打ち合わせはzoomで、展示会場はビデオのライブ映像を見て指示を出すようになりました。特に戸惑いはなかったです」。最近SNS(会員制交流サイト)の利用が広がり、ネット上で確認すれば消費者の反応がよく分かるので、店舗に足を運んで見て回る必要もないという。



函館市出身。連愛女子高校から東京の女子美術短期大学に進み、卒業後、スイマーを展開する株式会社白鳳に入社。現在はスイマー事業譲渡先である株式会社パティーズで活動中。旧スイマー時代の仕事をまとめたムック本「ひづめみか〜るの福音コレクション」(KADOKAWA MOON)を刊行。



お小遣い

庄司証／函館圏フリースクールすまいる代表

子育てをしていると、悩むテーマの一つが「お小遣い」ではないだろうか。まずあげるかどうか。いつ、いくらあげるか。どのようにあげるか。家計にも関わることだけにどうしても慎重になってしまふ。

かつては漁師や農家の手伝いをして「お駄賃」をもらったという記録が残っていたり、古いマンガの「コマには、楽しそうに駄菓子屋でお小遣いを使う様子が描かれていたりする。昔から、自らお金を手にして使うことは子どもにとって大事な体験だ、と考えられてきたことが伺える。

か。ある調査では、月額制の家庭の場合、小学生で1000円前後くらいなのだという。そういえば、自分が子どもの頃にいくらもらっていたかを思い出してみると、だいたい同じくらいの金額だったことに気がつく。実は、数十年の間、金額はほとんど変わっていないらしい。調べてみると、家計にかかわる消費者物価指数がバブル期を過ぎた1998年以降は停滞しており、お小遣い額もそれに連動しているのではないかとのことだ。お小遣いから経済が見えるのはなかなか興味深い。物価はじわじわと上がっている。収入もお小遣いも上がることを

切に願っている。
また、今の時代ならではの面白いニュースを見つけた。MMD研究所によると、子どもにお小遣いを渡すときの手段として、キャッシュレスを利用している親は2割以上だ、というのである。まだまだ6割以上が現金だが、小銭が使いにくくなっている現状を考えると、キャッシュレスの割合は今後増えていくのだろう。

思えば、子どもが欲しいものも、今や「物」ではない。音楽もCDではなくストリーミング、ゲームもカセットではなくダウンロードで、オンラインで購入する。多くの物をデータとして所有している。「キャッシュレスに慣れさせたい」という親の思いもあるのかもしれない。高校では2022年度



から「金融教育」が始まる。親にとっても子どもにとっても、お金に対しての見方や向き合い方が、きっと変化していくのだろう。
ただ、そんな新しい価値観が大事だと理解しつつも、子どもが、毎月少しずつ貯金箱に貯めたお金を、握りしめて、買い物するような風景が見られなくなるのかもしれないと思うと、それはそれで淋しいものである。

PROFILE

七飯町出身。北海道教育大学大学院修了。在学中から「チーフキリスト教学園」の活動に参加し、2012年「函館圏フリースクールすまいる」設立。不登校や若者の居場所支援などを行っている。

人と水と空と森の話 風景の中の時間

中川大介／人と水研究会



第二十四話

詩人の宮沢賢治は「時間的な立体視」ができる人だった。評論家の吉本隆明が遺作「宮沢賢治の世界」(筑摩選書、2012年)でそう書いていた。

吉本によれば、賢治には「風景の中に時間を(中略)それもある」力があつた。とりわけ岩石や地質について知識が豊かで、地質を見れば、はるか古代からそこで起きたできごとを幻視して空間に投影し、描写する稀有な力があつた。

「移らずしかもしづかにゆききする／巨きなすあしの生物たち／遠いほのかな記憶のなかの花のかをり」

吉本は詩集「春と修羅」所収

の「青森挽歌」にあるこの一節を引いている。最愛の妹トシを病で失った後、北海道、樺太への傷心の旅から生まれた詩である。トシが行ったであろう死後の世界の描写に、賢治が傾倒した大乘仏教の思想と「時間的な立体視」による幻影が交錯する。「地質学的な時間像」というものが、こういう眼にみえない大きな生物がそこらにいきまきし、その足跡が残っているというようにな、そういう死後の世界の想像力を助けただろう」と吉本は述べている。

「気圏の底」で苦闘する人間存在を天上の視座から見下ろす想像力をもち、その一人である自己を「有機交流電燈のひとつの

青い照明」(「春と修羅」序)という「現象」であると客観視した賢治。自身の「心象スケッチ」と呼んだその詩は具象と抽象とが交錯し、異なる発話主体のいくつもの声が交響曲のように響きあう。そこに「時間的な立体視」で見た過去の時間が通奏低音のように織りこまれていく。

川と付き合う

賢治ほどの想像力の射程はなににしても、「風景の中に時間を見る」力を持つ人は少なからずいる。

2020年7月に熊本県の山間を流れる急流・球磨川で起きた豪雨災害の教訓を伝える「流

PROFILE
岩手県生まれ。元新聞記者。カヌーや渓流での釣り好きが高じて人の暮らしと水のかかわりに興味をもち、仲間と「人と水研究会」をつくって、水辺歩きを続けている。

域治水がひろく川と人との関係」(嘉田由紀子編著、農文協、2021年)に、次の一節があつた。「川に近くに住む人が、雨が降ると川の様子を見に行くのは当たり前前で、水量や流速、上流から流れてくるものなどを見ながら川がこれからどうなるか分かるのです。増水する時には川の中心が盛り上がるのか、流木や大きなものがどどんと流れてくる時は、まだまだ増水するのかな、これはもう水量は落ち着くかな、ずっと川と付き合ってきたから分かることなのでしょう」

筆者は球磨川流域の同県球磨村で15年間暮らす市花由紀子(清流球磨川・川辺川を未来に

手渡す流域郡市民の会」(会員)。彼女は幾度も大水に遭ってきた住民たちの「川との関わり」の深さを感じていた。早くに水に浸かり始める家へ皆で手伝いに行き、家財道具を2階に上げ、車を高台の家の庭先に避難させる。川の変化を丹念に観察し、地域全体で備えをする文化があった。住民は川という空間に流れる時間を見ることができたのだらう。

それでも、20年の豪雨災害では村内で25人、流域では計50人の水死者(推測含む)が出た。国は水害後、環境破壊の懸念などから建設が凍結された川辺川ダムがあれば浸水を抑制できた、とのシミュレーションを公表した。しかし、被災者個々の属性や住宅事情、被災時の行動を市花らと調べた環境社会学者の嘉田由紀子(前滋賀県知事、現参院議員)は、森林の保水力の衰え、支流や街なかの水路の増水、さらには被災者の認知・移動能力、



住宅は屋根まで浸水し、必死で2階に逃れながら水死した犠牲者がいた。

年齢などが絡み合って犠牲は生じたのであり、ダム建設で解決する問題ではないと分析している。市花はこうも記す。

「ある方が言いました。『人間がどんなに想定しとっても自然はそれを超えてくる』。私も、球磨川が堤防を超えて来る様子を見て思ったこと一緒です。本当にこの言葉は被災者の心の叫びです」

自然はやすやすと人間の想定を超える。2011年に起きた東日本大震災の被災地で、幾度も聞いた言葉だ。想定を超えた場合に人はどう行動できるか。そこを考えねば犠牲は防げないことを私たちは震災から学んだ。

自然を見る目

震災の2年後、仙台市に訪れた津波研究の泰斗、東北大学名誉教授の首藤伸夫は私のインタビューにこう語った。

また水辺の風景や文化を大切に『ふれあい価値』(嘉田)を大切にしようと考えた。

流域全体で治水を―という発想は、21世紀に入る前から河川管理当局の中にあつた。だが、河川や田畑、宅地を異なる機関が所管する「縦割り行政」が実

現を阻んできた。気候変動がもたらす豪雨に直面し、当局は従来型の治水に上乘せする形で流域治水を進めようとしている。だが嘉田らは気候変動とかかわりなく一定程度の洪水だけを対象とする治水から脱し、水と人の関わりを再生すべきだ、と訴えている。

ゆっくり流す

流域治水の根本にあるのが、水を「ゆっくり流す」という考え方だ。雨が

「目の前の事を見て、判断して行動する。その力を受け継いでいかないと、いかに防潮堤を整えても津波の犠牲者はなくなる」(2013年9月1日北海道新聞朝刊)

「自然を見る目」が、1960年代から失われてきたと首藤は言った。ダムや堤防、防潮堤が造られて、安全や便利さと引き換えに「人」は「水」から遠ざかった。かろうじて自然を見る目を保ち得ていた球磨村のような地域でも、気候変動の中

で激しさを増す降雨への対応は困難になっている。「流域治水がひらく川と人との関係」では、研究者が「流域治水」という考え方を提唱している。嘉田の言葉を借りれば「集水域である山岳部から氾濫原である平野部まで、流域全体で受け止める治水であり、国土の在り方を



球磨川水系の破壊現場。すさまじい水の力を物語る。11次ページの写真とも2020年4月、熊本県球磨村撮影・市花保「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会」

を根本的に問い直す挑戦」だ。

従来の河川治水は、川ごとに「制御すべき流量」を設定し、河道で水を極力速く流しながらダムや堤防で制御して、水を「あふれさせない」ことを追求する。これに対し、流域治水は水が「あ

舗装で地面を固めてしまうのではなく、水がしみこむことのできる粒子構造をもった土の面を残すのだ。本書で河川工学者の島谷幸宏はこう説明している。「流域治水」というのは、流域からの流出抑制をめざします(中略)水を集めない、水を速く流さない、氾濫しても甚大な被害を出さない―そういう手法になります」

ゆっくりと流れる水。それは近代化の中で私たちが失ってきたものだ。川を直線化し、水を速く流し、ダムや落差工で制御する。そうした近代の治水は流域の土地の高度利用を可能にしたが、水を人から遠い存在にした。函館の川べりでも「よい子は川に近寄らない」といった看板を見かけた。行政に水の問題を任せきりにすることで、私たちは苦難を逃れ、自然を見る目、水に対処する力を失っていた。

は、人と自然のかかわりの再生が欠かせないように思えてならない。風景の中に長い時間を見ながら、自然の変化にいかに対処すべきかを見極める力を取り戻すことが。

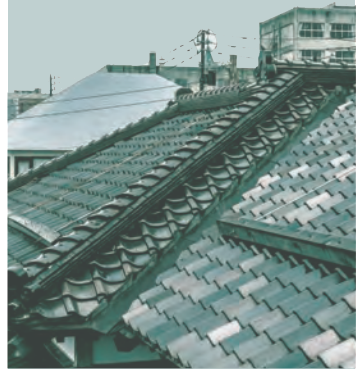
熊本県知事は水害後、川辺川ダムの建設容認に転じ、巨大公共事業が復活しようとしている。これに異議をとなえる「流域郡市民の会」は「球磨川宣言」をまとめた。自然とかかわり、自然とともに生きようとする人の覚悟が見て取れる。

「私たちはここで被災したが、これからも球磨川と共に生き続ける。川を壊す技術ではなく、土地の成り立ちを踏まえ、省庁の縦割りに疑問を呈し、住民参加に基づく意思決定の上で、自然豊かな川を実現しようとするまちづくりや人間社会のあり方を求め続けることをここに宣言する」

(敬称略)

はこだて たてものがたり

向田薫 / NPO法人はこだて街なかプロジェクト



交錯する二つの思い / ザ・グラススタジオイン函館 (函館市末広町)

函館ベイエリアの一角で美しいガラス製品を制作・販売する「ザ・グラススタジオイン函館」は、1910(明治43)年に海産物の倉庫として建てられた。レンガ造、屋根は瓦葺きの寄棟造で、軒蛇腹と出入口のアーチ型が特徴的な洋風建築である。

レンガ造の建物

この建物を語る上で欠かせない人物と施設がある。建物の所有者・陳有崎(ちんゆうき)と、店主のガラス工芸作家・水口謙

(みずぐちはかる)。そして、2人が出会った同じレンガ造の商業施設「函館ユニオン・スクエア」(現「はこだて明治館」、函館市豊川町)である。

の若手クラフトマンの活動拠点兼ねて1983年に開業した。函館が今ほど観光化されていなかった80年代初頭、新しい感性と洒落た雰囲気は住民を魅了した。古建築を市民がよみがえらせるなど当時珍しく、手ごたえを得た若者たちは施設内のバーでまちの在り方を熱く語り合ったという。

時代の熱気

一方、水口は歴史的な建物にはさほど興味がなかった。砥部焼で知られる愛媛県生まれ。大阪の硝子製品製造会社を経て1979年、仲間6人で

小樽に「ザ・グラススタジオ」を設立した。職人がガラスを吹いてタンブラーなどの商品を作る姿を客に見せる「工房兼ギャラリー」というスタイルは、当時は斬新なものであった。

その4年後、ユニオン・スクエアの開業に合わせて、水口は自ら函館に移ってきた。小樽時代と同じ「制作風景を見せる」スタイル。吹きガラスの体験も

風格あるレンガ造の「ザ・グラススタジオイン函館」の前に立つ水口謙



できるようにして、ガラス製品を函館土産の一つとして定着させた水口は、1992年、スクエアからの移転を決意する。移転先を陳に相談したところ、ちょうど海産物の倉庫を借り受けた陳が「改修するからそこへ入れ」と水口を誘ったのだった。2人はそれほど親しい間柄ではなかった。それでも移転先を陳に相談する水口と、改修費を出して水口を誘致する陳の関係が面白い。ユニオン・スクエアに充滿した時代の熱気を体感した二人の、関係の妙だろうか。

火を焚いて

概して、歴史的な建築物の再活用は我慢を強いられる。レンガ造で冬の寒さは耐えがたい。しかし、窓の火を絶やさないガラス作りの仕事では、寒さを感じることはないという。レンガ造は火事の心配も少ない。「火を焚くことで、この建物が活き

てくる」。30年以上、この建物を使い続けて来た水口の言葉には重みがある。

1859(安政6)年に国際貿易港として開港した函館は、三方を海に囲まれ、海からの強風で大火に悩まされてきた。港周辺の倉庫は耐火性が課題であった。中でもレンガ造が多用されたのは、海風による塩害への耐久性からだと言われている。1905(明治38)年の日露戦争終結後、函館港は海産物など

を保管する重要な基地となる。グラススタジオは、そんな時代の中で建てられたのだ。レンガの長い方向(長手)と短い方向(小口)を一段ずつ交互に積む「オランダ積み」で造られている。「街並みを守りたい」と考える陳と、「生活の中に良質のガラスを」と願う水口。二つの思いが交錯する古いレンガ造の建物で、水口は今日も窓に火を焚いている。(敬称略)



DATA

建築年 / 1910(明治43)年
構造 / レンガ造平屋
延べ面積 / 115.70㎡
様式 / 洋風建築、瓦葺き屋根寄棟造

写真 / FOLPHOTO 水本健人



※「はこだて街なかプロジェクト」のホームページに、この連載のサイドストーリーを掲載しています。

わび寂びライカ

西野鷹志 / 文・写真

わがカメラ事始めは、30年ほどまえのイタリアの旅。出発まぎわに「写真の撮り方入門」を手にした泥縄そのものであった。

そんな初心者が、プロ仕様のピンントも露出も手動のニコンF3で撮って、ピンボケだらけのネガの山を築いた。アッシジの路地裏。あ、同じカメラを持っている！とお互い思わず駆けよった相手がドイツの女子学生であった。

ベテラン風情の彼女は、プロ風にニコンを「ナイコン」と発音して、ライカより良い「キヤメラ」と。

イタリアの失敗写真から抜けだそうとF3のシャッターをやたらと切った。風景、花、猫、鳥、路地、人物となんでもござれ。ただし婦人科、ヌードは撮らずじまい。とどのつまり、肌があうのは白黒フィルムの街角スナップと覚った。友人の写真家はスナップならライカと一押し。

ライカM6、50mmレンズ、白黒フィルムを相棒に、ニューヨーク、ヨーロッパ、日本の裏町をひたすらさ迷い歩く。小型、軽

量なM6で裏通りを動きまわり、白黒はゴミ箱を撮っても絵になると勝手に思い、裏道には生活感があふれていると肌で感じた。

2台目のライカはデジタルとなった。フィルムカメラは今や絶滅危惧種。白黒フィルムもどんどん消え、現像ラボも東京にあるだけ。現像にだして手もとに戻ってくるのは1ヶ月後。デジカメは瞬時に画像を見ることができ。それやこれや、わが輩もフィルムとおさばらしてライカモノクロームを持ち歩いている。

このライカモノクロームは、文字どおり白黒しか撮れない。目に見える世界はカラーだから、目に見えない世界を撮っているわけだ。ここにおもしろさがあり、創造的なアートの世界が広がる。名作といわれる写真の大半は白黒だ。

20世紀写真の巨匠カルティエ・ブレッソンはライカと50mmレンズを愛用、白黒一本だった。「絵画は瞑想、写真は短剣の一刺し」。スナップの「決定的瞬間の写真家」といわれたブレッソンの言葉だ。

お茶に「わび寂び」という言葉がある。千利休は四畳半の茶室を一畳半にして余分なものをそぎ落とし、お茶の世界を高めた。

ライカモノクロームも色彩をそぎ落した白黒だけの「わび寂びライカ」。禁欲的だ。ダメ写真もアートになるかもとシャッターを切っている。



NY グランドセントラル駅 (1994)



北海道 層雲峡 (2014)

PROFILE

西野鷹志(にしの・たかし) 東京生まれ、函館育ち。タウン誌・街で「ライカは行く」を17年間連載、2012年・147回で終えた。すきなもの—フランスパンの皮、ブルゴーニュワイン、ライカM6。

HIF主催の9月のイベントのご案内。

今年も開催します！SDGsマルシェ vol.4

●2030年に向けて地球が進むべき方向を示しているSDGs。「誰ひとり取り残さない」をテーマに、ひとりから地域へ、地域から世界へ。あなたの小さなアクションが世界を変える「ナチュラルなライフスタイル」を提案します。

【日時】

2022年9月17日(土)・18日(日)

11:00～16:00

【場所】

函館萬屋書店

〒041-0802 函館市石川町85-1 1階中央吹き抜けマルシェ&2階ステージ

【出展者】

函館市 北海道環境財団 おひるごはんカフェtaom ironowa 函館YWCA 710candle 魚まさ にこにこ子ども食堂 外務省NGO相談員 北海道国際交流センター はこだて工芸舎 tombolo アースデイ函館実行委員会 嘉福堂キッチン(カドウフーズ株式会社) ぱん屋wakka Jimo豆腐Soia Bitte 共働学舎新得農場 aimer 社会的責任向上のためのNPO/NGOネットワーク 特定非営利活動法人 NICE (日本国際ワークキャンプセンター)



SDGsマルシェ vol.3の様子。

見続けてきたアフガニスタンの今。-長倉洋海氏講演会-



長倉洋海公式サイトより。

●アフガニスタンについて、新たな視点で考えてみませんか。写真家として、一人の人間として、アフガニスタンを何度も訪れ、現地の人と交流を深めた長倉さんだから知ってお話を聞かせませんか。ニュースで見聞きしていたアフガニスタンとは違う発見がたくさんあるはずです。

【日時】

2022年9月23日(金・祝)

13:30-15:00(13:00開場)

【会場】函館国際ホテル 鳳凰

【入場】無料 【定員】100名(定員になり次第締め切り)

【主催・申し込み】

(一財)北海道国際交流センター

●長倉洋海(ながくら・ひろみ)プロフィール

写真家。1952年、北海道釧路市生まれ。1980年、勤めていた通信社を辞め、フリーの写真家となる。以降、世界の紛争地を精力的に取材する。中でもアフガニスタン抵抗運動の指導者マサドを長いスパンで撮影し続ける。戦争の表層よりもそこに生きる人間そのものを捉えようとするカメラアイは、写真集「マサド 愛しの大地アフガン」や「獅子よ眠れ」などに結実した。最新作に「マサドの戦い」(河出文庫)「アフガニスタン マサドが命を懸けた国」(白水社)がある。



「日本語を教える」と言うこと。

櫻坂麻規子

／HIF スタッフ・元日本語講師



「今日私はレストランに行きます」と誰かが言った時、あなたは何と応えますか。ここから会話を広げるとしたら、何と続けるでしょうか。

初級日本語クラスでは、限られた単語と文法を駆使してここから質問タイムが始まります。「何時に?」「だれと?」「どのレストランに?」「何を食べますか?」「何を飲みますか?」「よくレストランに行きますか?」「どんなレストランですか?」など、聞ける質問は意外に多い。そして答えが返ってきた時には、「ああ、そうですか」と言うように促します。そうすると、学生は質問した数だけ「ああ、そうですか」を連発することに。この「ああ、そうですか」は「Oh, I see.」と訳すことができますが、「英語ではそんなに言わない」というのが学生の共通の見解。日本語でも実際にはそんなに使わないかもしれませんが、恐らく英語ほどの違和感はないでしょう。そして何よりも、「私は聞いているよ。私はあなたの話に興味があるよ。」という姿勢を相手に示しながら、お互いに気持ちよくコミュニケーションを進めることができる大切なツールです。

このように、日本語のクラスでは、日本語を初めて学ぶ初級のクラスでも、大学生としてふさわしい日本語でのコミュニケーション方法を紹介します。そう言えば、私が初めてホストファミリーとして留学生の受け入れをした時、いつの間にか留学生を質問攻めにしてしまっていたのは、一種の職業病かもしれません。

PROFILE

旭川出身。ICU卒業。ウィスコンシン大学マディソン校東アジア語学・文学学科修士課程卒業。日本語アシスタント、南カリフォルニア大学日本語専任講師を経て2014年9月からHIFスタッフ。



監督/ジョージ・ルーカス
脚本/ジョージ・ルーカス、ジョナサン・ヘイルズ
音楽/ジョン・ウィリアムズ
出演/ユアン・マクレガー、ナタリー・ポートマン、ヘイデン・クリステンセン

映画界では、フィルムからデジタルへ時代の新しい波は急速に進んでいます。デジタル映画の元年は2010年と言われています。「フィルムで撮ってフィルムで上映」という映画の常識がもうなくなりましした。1893年にエジソンが発明した自動映像販売機「キネトスコープ」は1人だけが動く映像を

見られるという装置でしたが、それを、多くの人が一度に見られるという現在の映画の形にしたのは、映画の父と呼ばれるリュミエール兄弟が発明した「シネマトグラフ・リュミエール」です。世界で初めて全編デジタルで撮影が行われたのが、ハリウッド映画の巨匠・ジョージ・ルーカス監督の2002年公開の「スターウォーズ エピソード2/クローンの攻撃」です。シリーズ初のロマンスを描きながら、シリーズ史上かつてないアクション巨編です。日本映画ではその3年後、山崎貴監督の「ALWAYS

三丁目の夕日」(2005)が実写とCGの融合で日本の昭和30年代を鮮やかに描いています。しかし、昔ながらのフィルム映画には、フィルム上映ならではの良さがあります。独特の質感や雰囲気、「映画らしさ」を感じさせる粒子の粗さなど。フィルム映画を愛する人がいなくならない限り、フィルムをまわす映画館はなくなりません。

PROFILE

滝川市出身。函館における数多くの文化事業や施設イベントの企画運営に携わる。

シネマで
コーヒーブレイク
米田哲平
／函館港イルミネーション映画祭実行委員長
(2002年)

「スター・ウォーズ エピソード2/クローンの攻撃」



(一財)北海道国際交流センター(HIF)

040-0054 函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail: event@hif.or.jp

<http://www.hif.or.jp>



お知らせとお願い。

季刊 [アット・エイチ]
@h

AUGUST 2022

●発行人 池田 誠 (HIF)
●編集スタッフ 吉村美悠

●連載 & 編集協力 (敬称略)
中川大介
長谷山裕一

●デザイン 中村事務所

●撮影 saeru

●連載 (敬称略)
西野鷹志
庄司 証
米田哲平
櫻坂麻規子

●イラストレーション NAZU (表紙)
中村ひでのり (本文)

はこたて街なかプロジェクト

●サポーター会員 (敬称略)
稲泉 省 / 鈴木詔次 / 前岡一郎
松本百合 / 川上 納 / 田中真一
山下淳一 / 栗林ゆか / 香内孝之
則竹知子

2022年夏号(年4回発行)
2022年8月31日発行
(一財)北海道国際交流センター(HIF)
[@h(アット・エイチ)]編集事務局
040-0054 函館市元町14-1
TEL: 0138-22-0770 FAX: 0138-22-0660
E-mail: volut@hif.or.jp http://www.hif.or.jp/volut/

禁・無断転載

2003年に札幌で行われていた全国NPO集會でお会いした「ボラナビ倶楽部」の森田麻美子さん。彼女に触発される形でスタートした「情報誌ボラット」の発刊は2004年3月でした。当時は学生やら、主婦や仕事帰りの会社員らがボランティアで集まり、情報を発信するスタイルでした。そこから、改装「Volat」を経て、地域の社会課題に向き合う情報として、弊誌「@h」へとつながっていきました。

2020年から続く新型コロナウイルスの影響の中、なかなか思うように取材もできず、2年以上が過ぎました。その間、HIFの活動のあり方など、いろいろと考える時間があり、これからの情報の発信の有り様についても思いを巡らしました。結果、「@h」は今号でひとまず休刊とし、少し充電期間をおいて、「次」を考えていきたいと思っています。「ボラット」の創刊から今号の「@h」まで、18年間で通巻72号。これまで取材にご協力いただいたおおぜいの方々、原稿を提供していただいた連載執筆陣、編集スタッフ、そして何よりご購入いただいた読者の方々。みなさまにこの場を借りて心より感謝申し上げます。引き続きさまざまな形でHIFにお力をお借りする場面があると思います。これからもどうぞよろしくお願いたします。

(一財)北海道国際交流センター(HIF)

専務理事 池田 誠

H I F I N F O R M A T I O N

ここに子ども食堂からのお願いです。

ボランティアスタッフ募集しています。

HIFが運営する「ここに子ども食堂」は毎週金曜日に開催し、地域の子どものために食事を無料で提供しています。料理が得意な方、子どもたちとふれあうことが好きな方、子ども食堂に興味があり、携わってみたい方はぜひ一緒に活動してみませんか？
まずは見学だけでも大歓迎です！ぜひお気軽にご参加ください。



【活動期間】

毎週金曜日15:00~18:30
の間でご都合の良い時間に。1時間~。

【作業内容】

調理・後片付け・メニュー作り・イベント時スタッフなど。
※現在、新型コロナウイルス感染防止対策のため一堂に会する食事は中止しています。

【申込方法】

事前にTELまたはメールでご連絡下さい。希望の日時をお伺いたします。

食材のご寄付をお願いいたします。

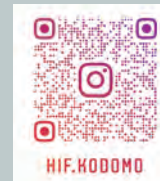
ご家庭に眠っている食品(期限切れのものはご遠慮ください)や、企業や商店で販売できなくなった加工食品・野菜・果物などをご提供ください。フードロスをなくすためにも、ぜひご協力をお願いします。また、ここに子ども食堂ではamazon Japan様のご協力により「ほしいものリスト」を作成しています。ご支援いただきたい食材などを公開していますので、ぜひご協力をお願いいたします！

Amazonほしいものリスト➡ <https://amzn.to/3DAE7Qn>

【ここに子ども食堂】

TEL:0138-22-0770 Mail:kodomo@hif.or.jp

※Instagramもフォローしてください！



<http://www.hif.or.jp>



(一財)北海道国際交流センター(HIF)
040-0054 函館市元町14-1
TEL:0138-22-0770 FAX:0138-22-0660
E-mail: event@hif.or.jp